

第1・2学年 算数科学習指導案

日時：平成17年10月27日（木）第2時限

場所：高根小学校 1・2年生教室

授業者：三島 亜紀

1. 単元名

1年生 「ひきざん」

2年生 「かけ算九九づくり」

2. 単元の目標

【1年生】

- くり下がりのある減法を日常生活に生かそうとする意欲をもつ。
- 10いくつかから1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算原理や方法を理解し、正しく計算できる。
- 10いくつかから1位数をひいて、差が1位数になる減法の適用問題を解いたり、問題を作ったりすることができる。
- 10いくつかから1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算カードを用いて計算の練習をし、計算に習熟する。

【2年生】

- 乗法に興味・関心をもち、進んで乗法九九を構成したり、適用したりしようとする。
- 乗法では、かける数が1ふえると、答えはかけられる数だけ大きくなることなどを活用して、6の段、7の段、8の段、9の段、1の段の九九を構成することができる。
- 6の段、7の段、8の段、9の段、1の段の唱え方を知り、それらを適用して問題を解決することができる。

3. 単元について

【1年生】

これまで児童は、10以下の数から1位数をひく減法、10より大きい数の構成、16－6のような計算、3口の数の計算、1位数と1位数をたして和が11以上になる加法の意味とその計算方法などを学習してきた。

そこで、本単元では、これらの理解をもとに、10いくつかから1位数をひいて差が1位数になる減法を学習させていく。前単元と同様、既習の考え方を生かして、計算のしかたの指導に重点をおき、くり下がりのある減法について理解させていく。

【2年生】

2学年では、乗法が用いられる実際の場面を通して、乗法の意味について理解できるようにする。また、乗法を構成したり、乗法九九について成り立つ性質に着目したりするなどして、乗法九九を身につけ、確実に計算できるようにすることをねらいとしている。

本単元は、前単元「10 かけ算」に引き続き、6の段から9の段および1の段の九九を学習させていく。児童は、前単元の学習を通して、乗法九九の答えを、乗法が1ふえると積は被乗数だけふえるという性質に着目して求めるようになってきている。ここでは、その

経験を生かし、児童自ら6～9の段および1の段の九九を構成し、乗法九九を身につけ、適用できるようにしていきたい。

4. 研究とのかかわりについて

研究内容1：教師の指導援助のあり方

【教師の出場の明確化】

複式授業では、教師がどちらの学年のどこで出るかということを確認しておくことが大切であるため、それぞれの場面でこのような指導・援助をするようにしている。

課題づくりでは、問題を読み、前時に学んだことを振り返る時間をとり、今日の学習は前時に学んだこととは、どこが違うのかを子どもたちに考えさせている。そうすることによって、本時に学ぶことが明らかになってきた。その際、子どもたちから出てきた言葉で、子ども自身が心に落ちる分かりやすい言葉でまとめて課題づくりをする。そういった課題づくりを繰り返していくうちに、子どもたちも少しずつ課題というものがどのようなもので、どのように作っていけば良いのかということを知りつつある。

ひとり学びでは、どのような具体物を準備しておくか、個別指導では、今まで学んだことのどこに気づかせて助言すれば良いのか、などの事前準備をすることによって、それぞれに自分なりの課題解決に取り組んだ。しかし、個人差があるので、理解力が十分でない児童に対しては、ひとり学びの際に担任が個別指導に入り、自分の考えを持たせてから相互交流に入れるよう配慮している。

相互交流では、1年生は、司会を中心に自分の考えを説明する。ねらいにせまる言葉や考え方などが子どもたちの発言から出たときに価値つけて板書し、みんなに広めらるようになっている。前単元から、考えを深めるための役割分担での交流を取り入れてみた。2年生は、教師が相手になり、質問やアドバイスをすることで学びを深めていけるようにしている。

まとめでは、1年生は、子どもたちが話し合っただけの練習をしている段階である。課題に対するまとめになるように教師が支援している。子どもたちの言葉を生かしながら、子どもの心におちるようまとめて板書するようにしている。2年生は、教師と話し合っただけの練習をしていく。

練習問題をする時間には、本時で学ぶべきことを一人一人がしっかりと理解できているかを把握する大切な場である。理解が不十分である児童に対しては、この場で個別指導している。

感想発表では、子ども自身がこの授業で学んだことと、学習姿勢について評価している。教師も子どもたちの姿を評価する時間をとることによって、子どもたちの励みとなり、次時への意欲へつなげている。

研究内容2：学習活動の工夫

【一時間の学習の流れの明確化】

進め方が分かるように、授業の流れをフラッシュカードで示した。時間の授業の見通しを持たせることで、司会はカードを手がかりにしながら進められるようになってきつつある。

【1名の2年生の学び方の工夫】

2年生もフラッシュカードを手がかりに進めている。一人であっても、「一人学びをします。」というように、声を出しながら進めていくようにしている。また、交流する際、教師が相手になるなど、声を出せる機会を多くつくることを意識して指導している。

たとえ一人であっても自分の考えをノートにまとめて書いたり、具体物等を使って人に説明したりする力をつけていくことを願っている。しかし、交流をする相手がいないため、担任が交流相手となり、質問をしたり、感想を言ったりして学びが深まるように工夫している。

【1年生の交流方法の工夫】

1年生の子どもたちは、必要に応じてペア交流にしているが、6人という少人数であるため算数の時間は全員で交流している。その際、一人ずつ具体物等を操作しながら、自分の考えを話す。

聞く時に子どもたちは、自分の考え方と比べながら聞くようにしている。そして、同じところや違う考えを発表し合うようにしている。

さらに前単元から、「おはなし」「うごかす」という役割分担をして、友だちの話を聞いてブロック操作をする中で理解を深めていくという交流の方法にも挑戦してみているところである。

研究内容3：学習集団の育成

【1年生の輪番制による司会】

1年生は、4月から「自分たちで学習を進められるように」ということを意識させながら輪番制で司会をさせて指導してきた。まだ、進めることで精一杯という段階であるが、フラッシュカードを手がかりにどの子も大きな声でリーダーができるように指導している。

【話し方・聞き方指導】

交流の際には、具体物を操作しながら教師や友だちに分かるように説明しようとする姿、友だちや教師の話を分かろうとしながら聞くことができる姿を認め、価値づけている。さらには、自分の考えと比べ、同じところや違うところに気づきながら学び合えるように指導しているところである。

【話形指導】

一人学び、交流の際、自分の考えを順序よく、友だちに分かるように説明できるようにするために、話形指導をしている。順序よく話せるためには、「はじめに」「次に」などの言葉をつかうようにしている。また、「～ですね。」「ここまでいいですか。」という言葉で、友だちや教師に確認しながら説明できるようにしている。

